

平和へのメッセージ

この度、上田市戦没者追悼式において、若者代表として平和へのメッセージをスピーチさせていただけることを大変光栄に存じます。

私は、現在長野大学で戦争の記憶を語り継ぐサークル「Peace Edu」に所属しています。サークルでは、太平洋戦争当時を生き抜いてこられた方々から戦時下の日常の生活体験を直接聞きとることや、上田市内に残る戦争遺跡のフィールドワークを行い、記録集「若者たちへの伝言」に残す活動をしております。



今年は、戦後 80 年の節目の年になります。私たちの祖父母は、戦時下を体験していない方々が大半となってきました。したがって、家族の中で戦争中のことが話題に上ることもほとんどなくなっているのではないのでしょうか。私の家族でも同様でした。私にとっての戦争は、自分とはあまり関係のない「教科書のなかで学ぶ歴史上の出来事」という認識だったように思います。しかし、サークルの活動を行う中で認識が変わってきました。市内在住の戦時下を体験された方々から直接お話を聞くことで、当時の過酷な状況や悲惨さを、現実味をもって知ることができました。このような貴重な体験ができるのは、今しかないと思っています。その中でも、上田市にも空襲があり亡くなられた方がいることや終戦が過ぎても苦しみ続けた人がいることは、今を生きる多くの人に知ってもらいたいと考えさせられるものでした。

1944年12月9日長野県初の空襲が上田にありました。当時の小県蚕業（現在の上田

東高校)の校舎がほとんど燃え落ちました。現在敷地内に残る「戦災記念の櫓」が当時の焼夷弾による爆撃の痕跡を残しています。翌日、焼夷弾の処理中に小学生3名がやけどを負って亡くなったこともショッキングな出来事でした。また、仁古田の地下飛行機部品製造工場跡地で約4400人の朝鮮人の方が強制労働させられていた事実や旧上田飛行場の特攻隊員の教官をしていた遊佐卯之助准尉が1945年(昭和20年)8月18日に妻秀子さんや生後27日の久子さんともども自決した富士山地区の猫山にある自決地に供養塔や慰霊碑が建てられていることを知りました。そして、旧上田飛行場跡地(現在の上田千曲高校)なども実際に訪れ、資料などから学ぶ中で、私たちが暮らす、この上田市も戦争の一舞台であり、こうした歴史の上で日々の生活が成り立っていることを実感してきました。

さらに、中学生に語り継ぐ活動では、真剣な眼差しで私たちの話を聞く生徒たちの姿を見て、若い世代が共に協力し合い、平和を繋いでいくことの大切さに気づかされました。いつの間にか、私にとって戦争が「教科書で学ぶ歴史上の出来事」から、今を生きる私たちにも繋がる出来事という認識に変わり、「もっと戦争について知りたい」、「伝えていきたい」と思うようになっていました。

そこで、今年、大学生活最後の夏休みを使って知覧特攻平和会館を訪れました。鹿児島県にある知覧は、旧上田飛行場で訓練を積んだ20歳前後の10数人を含む特攻隊員が、激戦地である沖縄へ出撃する前に過ごした最後の地です。知覧特攻平和会館には、特攻隊員の遺品や手紙が展示されていました。

特に、家族や恋人などの大切な人々に向けて綴られた手紙にあった

「あなたの幸せを希ふ(ねがう)以外に何物もない」

「私は飛び立ちます」

「さようなら」

などの言葉は、私の心に強い衝撃を残し、今でも頭の中に繰り返されることがあります。

私たちと同世代の特攻隊員の方々が、どのような思いでこれらの言葉を綴っていたのかを想像することしかできませんが、私は、悔しいと感じました。楽しいことをしたり、綺麗な景色を見たりすることができるはずだった方々が自ら死に向かっていかなければならない無念さは、言葉にできないものがあつたと思います。展示室には、亡くなられた特攻隊員の写真もあつたことから、手紙の内容をより身近に感じ自然と涙が溢れてきました。全ての手紙に目を通したい気持ちと、読むたびに苦しくなる心の葛藤がありながらも、閉館時間までゆっくりと見て回りました。平和会館を去った後、どのような理由があつたとしても、命を奪い合うことに正しさは一つもないと痛感しました。

一方、中学生くらいの生徒たちが修学旅行で知覧特攻平和会館を訪れているのを見て、私ももっと早く訪れたかったと感じました。私は、高校生の時、新型コロナウイルス感染症が蔓延していたことで、沖縄への修学旅行に行くことができませんでした。そのため、戦争の

核心地、平和学習において重要な地での経験を伴う学びを受けることができませんでした。きっと、高校生の時に沖縄に訪れ、平和学習を十分に受けることができていたならば、戦争への理解や平和への活動に大学での時間をより多く費やすことができたと感じています。

しかし、私に残された大学生としての時間はわずかなものとなってしまいました。私は、来年度から教員として働くことが決まっています。現在の学校教育では、子どもたちの気持ちに働きかける教育が多く行われていると感じています。戦争の悲惨さや当時の人々の暮らしの大変さを知ることにより、「戦争はいけない」ことであるという気持ちを育むことができると思っています。これはとても大切なことです。しかし、それだけでは不十分だとも感じています。「戦争を起こさない、続けさせない社会を作る」ことが大切な世の中になってきているのです。世界では、現在もロシアによるウクライナ侵攻やパレスチナのガザへのイスラエルによる攻撃により多くの人々が過酷な生活を強いられ、多くの尊い命が奪われています。

平和な社会を作るためにはどうしたらいいのか、ということ子どもたちと考え、実際に行動できるようにするための教育を実践していきたいと思っています。戦争はいけない、という気持ちから、戦争を起こさない、という行動に移せるような子どもたちを育てていくためにも、これまでの活動でお聴きした貴重なお話や今に残る戦争遺跡を子どもたちに伝え続けていきます。平和のために行動することは、簡単なことではありませんが、微力ながら私も行動していきたいと思えます。

大学時代にサークル活動を通じて、他の大学生よりも戦争や平和について考えた私、戦争体験者から直接お話を聞いた最後の世代としての私が、一人の教員として、また、一人の日本国民として、子どもたちに戦争の恐ろしさや戦争体験者の方々の思いを、責任をもって伝え続けていくことを誓います。

令和7年11月18日

長野大学 社会福祉学部4年 小川真央